

すると、

「おい。さっさとやってしまおうぜ。」

と、真一の方から、声をかけるようになってきました。学級のふん囲気も、ようやく、以前のまじめさを取りもどしていました。

あるとき、先生が、正男のかたをほん
とたたいて、

「よくがんばったな。どうやら本物らしいな。」

と、にこにこしながらおっしゃいました。正男の心の中に、なんだか、自信のようなものがわいてきて、心がはればれとしました。

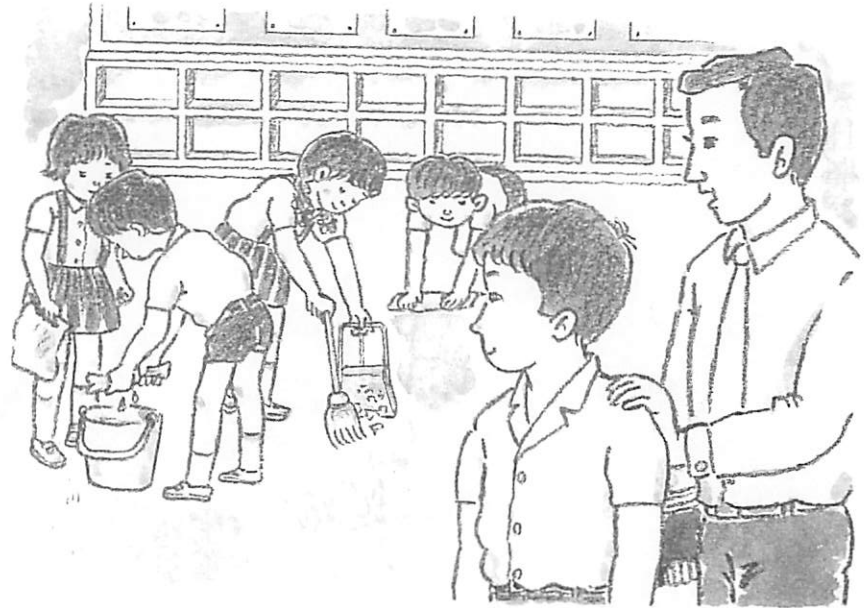
II あの日のこと

あやが十二才、妹が七才の時、母は病気で長い間入院していました。父は長きよりトラックの運転手でしたから、あやと妹は二人きりですごさなければならぬ夜もありました。

学校から帰ると、すぐに夕飯のしたくや、せんたくをするのですが、十二才のあやにとっては、気の重い仕事でした。

遊びつかれて帰ってきた妹は、あやの作る食事が待ちきれず、着がえもせず
にこたつでねてしまうこともありました。「なぜ、わたしだけがこんなつ
らい思いをしなければならぬの。」と、ふとんの中で、なみだばかりが流れ
る夜を何度もすごしたものでした。

あの日、いつものように買い物かごを下げて、夕方の商店街へ出かけました。



通りは、つとめ帰りの人や、買い物客でにぎわっていました。早く買い物をすませようとかけ出したとたん、わかい男の人にぶつかってしまいました。

そのひょうしに、買い物かごは、あやの手をはなれて、車道へころがっていききました。

キーツと急ブレーキの音がして、車は止まりました。車の人はすぐにおりてきて、ころげた買い物かごを拾い上げると、あやの方へ走りよってきました。

しかられるとばかり思っていたあやに、その人は、

「けがはなかったかい。」

と言って、心配そうにあやの顔をのぞきこみました。

ぶつかってしまったわかい男の人は、あやをだき上げて起こし、服のよごれをはらってくれました。

近くにいたおばさんたちは、ころげてしまったお金を拾い集めてくれました。

「あらあら、ひざこ
ぞうがすりむけて
いるわ。」

と言って、ポケット
から真っ白なハンカ
チを出して、ひざに
まいてくれたのは、
高校生のお姉さんた
ちでした。

遠くまでころげて
しまったじゃがいも
を手のひらにのせて、
にこっとほほえみか



けてくれたのは、はくはつ白髪の老紳士ろうしんしでした。

あやは、急に大きな声で、泣き出してしまいました。

近くの交番からは、何ごとかとおまわりさんまでやって来て、商店街の一角には、大きな大きな人の輪ができてしまいました。

「ね、だいじょうぶ。」

「もう、泣かないのよ。」

「心配しなくてもいいぞ。」

いろんな人の、いろんな声が、あやのまわりでしました。

そのやさしい声がうれしくて、あやの泣き声はますます大きくなっていきました。

しばらくして、やっとのことで、まわりの人たちに、

「ありがとうございます。」

と言って、頭を下げると、

「こまったときは、お

たがいさまよ。」

「たいしたことなくて、

よかったね。」

「本当だ、本当だ。」

と、みんなは、口ぐち

に思い思いのことを言

いながら、うなずき合

いました。

「家まで送ろう。」

と言ってくれたおまわ

りさんの自転車の後ろ

に乗って、夕日にそま



る坂道をおりていくとき、おまわりさんが、ぽつりぽつりと話しかけてきました。

「人は、一人では生きていけないのだよ。みんなだれかをたよってる。みんなだれかにたよられているんだ。その証拠が、さっきのできごと。」

おまわりさんの言葉は、あやの心にいたいほどしみました。

あの日から、あやは変わりました。

あのとときの、見知らぬ人たちから受けたやさしさを、今度はわたしが、いつか、どこかでお返しするのだという気持ちで、生活できるようになったのです。

あれからもう何年もすぎたのに、あの日のことだけは、いつでも、きのうのことのように思い出すことができますのです。

12 手のひらのかぎ

かみきたやま
上北山村の国道一六九号線で定期バスを走らせていた山本運転手は、道ばたでしきりに手をふっている一人の少年のすがたに、なぜかただならぬものを感じてバスを止めました。

「どうした、ぼうや。」

すると、少年は、バスのまどにかけよってさげびました。

「おじさん、助けてえ。友達が死にそうなんだよう。」

おどろいて山本運転手がバスをおりると、少年は泣きじゃくりながら道の下、のほうを指さしました。二、三メートルほど下の、つき出した大きな岩の上に、一人の少年が死んだようにうつぶせになっています。そばには自転車がころがっていました。

11 あの日のこと

2—(5) 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。(尊敬・感謝)

□主題設定の理由

〈ねらいとする価値について〉

人は一人では生きられない。複雑な人間関係の中であって、有形無形あるいは意図的無意図的な好意を受けながら生活をしている。このような好意や善意をありがたいと思うことが感謝である。しかし、人の好意の大小にかかわらず「ありがとう。」の一言ですませてしまう風潮がある。人の好意や善意の重さに思いをめぐらせ、人と人が支え合い助け合って、うるおいのある生活を送っていることに気付かせる必要がある。それができてこそ、自分もまた人に対し、深い思いやりの心で支え助けることができるといえる。

〈子どもの実態について〉

高学年になると、客観的に自分の行為や行動について見つめられるようになり、他者に対しても、その心情や立場などを理解できるようになる。家庭、学校、社会の中での生活体験を通して、人と人との支え合いや助け合いで自分の生活が成り立っていることも理解できる頃であ

る。また、援助や善意を受けた相手に対し、感謝の心をもつことも多い。しかし、そうした感謝の心をもとに、他者に対し、進んで返していこうとする自律的な態度が養われていないのが現状である。

〈資料について〉

主人公あやは、自分の不注意であったにもかかわらず、多くの人からの善意や援助を受ける。車の人、ぶつかった若い男の人、おばさん、高校生のお姉さん、白髪の老紳士のあたたかく、心やさしい好意や言葉に感激の涙を流す。それは、不遇な生活を送るあやにとり、多すぎるほどのやさしさであった。そして、おまわりさんの言葉に、あやは、自分もまた、いつかどこかでお返しするのだと決意する。あやの自分もまたと考える心情を追求することで、ねらいとする価値にせまることができる。

②ねらい

わたしたちのくらしが、多くの人々の助け合い、支え合いで成り立っていることに気付き、感謝しようとする心情を育てる。

□板書

あの日のこと

車の人
「けがはなかったかい。」

ぶつかった男の人
「だきおこし、服のよれをはらってくれる。」

高校生のお姉さん
「真つ白なハンカチでひざを巻いてくれる。」

白髪の老紳士
「じゃがいもを手のひらにのせ、にこっとほほえみかけてくれる。」

おまわりさん
「人は、ひとりでは生きていけないのだよ。みんなだれかをたよっているんだ。その証が、さっきのさきこと。」

あや
おどろき
うれしさ

多すぎるほどのやさしさ

急に大きな声で泣き出す。

受けたいやさしさを今度は、いつかどこかでお返しをしよう。

③展開

学 習 活 動	支 援 上 の 留 意 点
<p>(1) 人からやさしくされてうれしかった経験について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 人に親切にされてうれしかったことがありますか。 <p>(2) 資料「あの日のこと」を読んで、あやや周りの人たちの気持ちや行為について話し合う。</p> <p>① あやや周りの人について、どんな感想をもちましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周りの人たちは、ほんとうにやさしいと思う。 ・あやは、やさしくされたのでごくうれしかっただろう。 <p>② 車の人からしかられるとばかり思っていたのに、心配してくれたとき、あやはどんな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・しかられて当然なのに、びっくりした。 ・しかられるとびくびくしていたのに心配してくれたから、うれしかった。 <p>③ ぶつかった男の人、あやをだき上げ服のよれをはらってくれましたが、そのときはどんな気持ちになったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やっぱりびっくりしたと思う。ぶつかられておこっているはずなのにやさしくしてくれたからだ。 ・あやの方が悪いはずなのにこんなにやさしくされると、あやはとてもうれしかったと思う。 <p>④ 近くにいたおばさんもお姉さんも老紳士もあやにやさしくしてくれましたが、やはりあやはどんな気持ちになったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関係のない人までがやさしくしてくれたからうれしかった。 ・次々にやさしくしてくれるから、胸がいっぱいになった。 <p>⑤ あやが急に大きな声で泣き出したのは、どうしてでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周りの人のやさしさにたまらなくうれしかったからだ。 <p>⑥ おまわりさんの言葉などから、自分が受けたやさしさをいつかどこかでお返しするのだと考えたのは、どうしてでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あまりに人々のやさしさがうれしかったので、自分もその恩返しをしたいと考えた。 ・ひとりでは生きていけない。助け合っていくことが大切なんだとわかったからだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいとする価値にかかわる意識がもてるようにする。 ・あややまわりの人たちに対して自由に感想を述べ合う中で、共通の問題意識がもてるようにする。 ・あやの感激をあらずじに沿いながら追体験できるようにする。 ・普通なら買められる立場にあるあやだっただけに、人々のやさしさがどれほどあやを感激させたのかを、人々の行為に着目させることでつかめるようにする。 ・当事者だけでなく、周りの人にまでやさしくされ、感激するあやの気持ちに共感できるようにする。 ・あまりあるやさしさに対する感激の涙であったことに気付くようにする。 ・おまわりさんの言葉の意味を考えさせ、その言葉と人々からのやさしさによる感激があやの心を大きく変えたことを理解できるようにする。 ・人のやさしさにどう応えとよいのかを体験を通して考えられるようにする。 (心のノート P52～55) ・実践への意欲がもてるようにする。
<p>(3) 自分たちの生活について振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ あなたが伝えた思いやりや受けとめた思いやりをふり返ってみましょう。 ・けがをしたときに、兄が家まで背おって帰ってくれた。 <p>(4) 教師の話を聞く。</p>	